8/28
月

食物アレルギーと、どうつきあっていくか②
食物アレルギーは「子どもの病気」？

食物のタンパク質は、加熱したりよく噛んで唾液が十分に出たり、胃や腸を通過する過程で消化液にさらされることによって、分解、吸収されます。食物アレルギーは体の免疫システムがセンサーの働きをして、未消化の分子が大きいままのタンパク質をキャッチして「異物」と認識します。タンパク質がペプチドやアミノ酸に分解されてしまえば、分子は小さくなりセンサーには引っかからないので、アレルギー反応はほとんど起こりません。

この仕組みを前提にすると、「消化が未発達な乳幼児はアレルギー反応が起こりやすく、消化ができるようになればアレルギー反応は起きなくなるのではないか」と考えたくなります。厚生労働省の科学研究費助成事業のモニタリング調査や文部科学省などの統計調査を見ると、たしかに乳幼児にアレルギーは多く、年齢が上がるにつれて患者数は少なくなるようです。けれど二十歳以降の年齢で、また少し増える傾向も見られます。消化以外にもホルモンバランスの影響や自律神経のバランスなど、さまざまな要因が影響していると考えられています。

子どもに多い病気ではありますが、大人の患者さんもいます。主に子どもの頃に発症しますが、大人になって突然発症する人もいます。成長とともに症状が起こらなくなる人も、そうならない人もいるのです。

NPO法人　アトピッ子地球の子ネットワーク　事務局長　赤城智美